

平成21年5月1日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2005～2008

課題番号：17520444

研究課題名（和文） 中近世移行期の社会経済の構造的変化と公権力

研究課題名（英文） Structural Change of Social Economy and Public Power in the Transitional 16th and 17th centuries

研究代表者

本多 博之（HONDA HIROYUKI）

広島大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：30268669

研究成果の概要：

日本の中近世移行期における貨幣流通の実態と米の性格や機能、それに対する中央政権や大名権力、あるいは諸領主らの対応の歴史的展開について、財政運営や権力編成の視点もふまえ、文献史学の立場で具体的に明らかにし、統一政権の誕生と貨幣の問題、そして石高制成立の歴史的背景について考察した。また、安芸厳島や石見銀山・温泉津をめぐる経済構造と、公権力による支配の展開について明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	600,000	0	600,000
2006年度	500,000	0	500,000
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,100,000	300,000	2,400,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：貨幣、銭貨、銀、石高制、毛利氏、厳島、石見銀山

1. 研究開始当初の背景

(1) 東洋史や考古学に続き、日本史（文献史学）分野でも1990年代以降、日本中世の貨幣史研究が急速に進みつつあり、銭貨だけでなく、米の性格や機能、そして金銀の動向についての関心が急速に高まり、研究の飛躍的な進展が期待される状況にあった。

(2) 世界遺産「厳島神社」の登録10周年を

目前に控え、厳島を対象とする学際的な研究が再び活発化しつつあり、歴史学においても中世の研究成果をふまえて近世厳島について新たな研究の進展が求められていた。

(3) 石見銀山遺跡の世界遺産登録に向けて、文献・考古・民俗学的調査が進みつつあり、石見銀山および温泉津に関しても文献史学の立場から研究の進展が望まれていた。

2. 研究の目的

(1) 中近世移行期における貨幣(銭・銀)流通の実態と、米の性格や機能、さらには公権力の政策的対応を明らかにし、当該期の社会経済の構造とその史的展開を分析する。

(2) 知行制や軍役賦課など権力編成の基本原則としての石高制の成立と貨幣流通の関係について、織豊政権期から徳川政権成立までを視野に入れて考察する。

(3) 安芸厳島をとりまく社会経済の構造的変化について、厳島門前町の構成と住民の動向に注目しながら明らかにする。

(4) 石見銀山および温泉津をとりまく経済構造を明らかにし、戦国大名毛利氏による当該地域の支配の実態を考察する。

3. 研究の方法

(1) 日本中世貨幣研究に必要な関係図書(学術書・資料集)を購入するとともに、国内各地(島根県・岡山県・山口県・三重県)で出張調査を実施し、公共機関や個人宅で古文書など歴史資料の閲覧・撮影をおこなった。

(2) 収集した史料をふまえ、当該期の貨幣流通の実態と公権力の政策的対応、石高制成立の歴史的背景を明らかにしたほか、東国も視野に入れて統一政権の成立と貨幣について検討した。

(3) 大願寺所蔵厳島絵図の調査(閲覧・撮影)をふまえ、17世紀厳島門前町の復元作業を実施し、現地調査の成果を重ね合わせることで、住人構成の具体的な分析をおこなった。

(4) 石見銀山および温泉津関係史料の調査(閲覧・撮影)を島根県および山口県で実施し、未紹介史料の発掘に努め、その分析をおこなった。

4. 研究成果

(1) 日本の中近世移行期における貨幣(銭・銀)流通の実態と、米の性格や機能、それに対する中央政権や地域大名の政策的対応を明らかにし、石高制成立の歴史的背景について探るこ

とができた。

すなわち、中世東アジアの国際秩序を背景とする中国王朝鑄造銭貨(「制銭」)の周辺諸国への流布は各国に大きな影響を及ぼしたが、日本も例外ではなかった。ただ、中国「制銭」は、日宋関係の時代はもとより、日明関係の時代にあっても、国家間の貿易のみによって日本に流入したのではなく、日本国内の大名権力、国人領主など地域領主、そして海商らによる積極的な貿易・通商活動により、様々なルートを通じて他の外国銭貨とともに日本に流入した。とりわけ畿内・西国には、各地の諸勢力が独自に外交・貿易を展開したことで、渡来銭の活発な流入があったと推測され、中国王朝発行の良質銭貨だけでなく低品位の民間私鑄銭がそれに加わり、その混在状況がやがて日本国内の銭貨取引に大きな混乱(「撰銭」の発生)をもたらした。中央政権による一括した入手と市場投下の形をとらない以上、渡来銭の流通はいわば民間(地域社会)主導であり、国内私鑄銭も加わって15世紀後半以降は、異なる価値の多様な銭貨が様々な通用範囲で重層的な流通を展開していたと思われる。

そして16世紀に入ると、いわゆる戦国大名が広域公権力として自らの領国を「国家」とみなして領国支配を始めるが、銭貨に加えて新たに高額貨幣として流通し始めた金・銀の通用状況に対して個々に通貨政策を実施したのであり、特に東アジア的規模で展開する流通経済の舞台に積極的に参入した西国の大名や諸領主は、国際通貨である銀を元手に独自の通商活動を展開した。その結果、16世紀半ばには大量の外国産品が日本に流入し、その取引手段として金・銀が国内各地の都市を中心に利用されるようになった。とりわけ、唐物をはじめとする高額商品が取引されていた畿内主要都市では、織田信長が流通市場にすでに存在する多様な銭貨と新たに登場した金・銀に対し、精銭(善銭)を基準とする銭貨秩序を設定するとともに、その精銭と金・銀を独自の換算基準で結びつける方向性を提示したのであり、それはその後誕生する中央政権の通貨政策にも多大な影響を及ぼすことになった。

しかし当時はまだ、国内各地の大名権力が銭貨や金・銀の流通する現状をふまえた通貨法令を発布、あるいは金・銀貨(領国貨幣)の鑄造

をおこなうなど、独自の対応をおこなっていた。したがって豊臣政権の登場は、単に国内統一というだけでなく、通貨制度においても国家的「統一」の道筋を付けた点で重要な意味を持つ。すなわち豊臣政権は、畿内政権として高額貨幣である金・銀と米を中心に財政運営をおこなう一方、重量と品位を保証する法貨としての天正大判を铸造するが、それは金を計数貨幣とする日本独自の通貨制度を創出する方向性を持っていた。そして、当時畿内で精銭として扱われていた「ひた銭」を基準銭に位置づけ、金との換算基準を設定するなど、それは通貨の面で、明国を中心とする国際秩序からの「自立」を図ろうとする華夷意識の発露とみることができる。また同政権は、国内の金銀鉱山を公儀のものとして掌握し、長崎を直轄港として外交・貿易を独占しようとする姿勢のもと、国内通貨であるとともに国際通貨でもある銀を秤量貨幣として铸造するが、その結果、従来銀を元手に東アジア諸国と密接な通商関係を持っていた西国諸地域はその関係を断ち切れ、豊臣政権以降の中央政権が統制強化をめざす、いわば「国内経済圏」の中にしだいに組み込まれていくことになる。

続いて誕生した徳川政権は、国内統治権を確立した豊臣政権の支配方式を基本的に継承するが、東国関東に政権基盤を置いたことにより、永楽銭基準の通貨慣行への対応を余儀なくされる。そこで、関東では依然高い価値を持つ永楽銭と低品位銭貨の使用を共に禁じ、畿内の標準銭貨で精銭とみなされていた鐳銭（京銭・ひた銭）を基準銭とする一方、それと一定の換算基準で結ばれる金貨（慶長小判）を新たに铸造・発行し、金を中心とする日本独自の通貨制度を創出した。また、豊臣政権の政策を継承し、国内の金銀鉱山や主要都市を直轄化して長崎を拠点に貿易を統制しようとする姿勢は、東アジアの国際通貨である銀を必要とし、それが丁銀など幕府公鑄の秤量貨幣をも誕生させることになった。

そして、通貨法令をはじめとする諸政策の実施により、基準銭として社会的信任を得た鐳銭（京銭）の価格水準のもと、幕府はついに独自の銭貨（寛永通宝）を铸造・発行することになるが、それは中世までの渡来銭中心の貨幣制度からの「自立」を意味した。そこには、明国が滅亡に向かい清国が成立するなか、織豊政権以

来、天下人の登場により日本国内で徐々に醸成されつつあった華夷意識の存在が窺える。

すなわち近世三貨体制は、一両＝四貫文という換算基準で結びついた、ともに計数貨幣（国内通貨）の金と銭、そして対外貿易を統制下に置こうとする幕府が必要とした秤量貨幣（国内通貨であり国際通貨）の銀という、本来性格の異なる二種類の通貨体系が組み合わせられたものであり、それこそ日本型華夷意識の高まりの中で国内統治と対外政策を同時に推進しようとする徳川政権の施政方針が通貨制度に反映されたものと思われる。それは、織田政権から豊臣政権を経て徳川政権が誕生する過程で、日本独自の金・銀・銭の換算基準の設定に始まり、日本独自の金・銀・銭の貨幣铸造で結実したが、言うまでもなくそれは当初から予定されていたのではなく、国内的にはその時々々の中央政権が直面した通貨事情に、そして対外的には東アジアの貿易構造や国際関係に強く影響を受けた歴史的所産と言える。

（2）中近世移行期の安芸厳島の門前町と町衆について研究を進めるとともに、大願寺所蔵厳島絵図を調査・分析し、厳島門前町の復元作業をおこない、住人構成について明らかにした。

すなわち、大願寺蔵厳島絵図から得られる情報は多く、かつ貴重であり、17世紀末期の島内の様子、たとえば地形や植生など自然環境だけでなく様々な建物や史跡など、今は失われてしまった数々のものを復元していく上で重要な手がかりとなる。とりわけ厳島神社をとりまく町場の様子が、平面的ではあるものの、具体的にわかる点で貴重である。なかでも社家・内侍・寺院（坊）の名前（名称）や屋敷・建物の場所、町家の屋号や住人名などは、特に重要な情報である。これは今後、当該期の古文書など文献資料と比較検討することにより、様々な歴史的事実を明らかに出来る可能性を秘めている。

また『厳島道芝記』は、諸国の名所巡りが盛んになった江戸時代前期の厳島案内の書として、豊富な情報量を持つ。そして貝原益軒の「厳島佳景」も、やはり同じ時期の厳島の町場の様子が、人々の動きとともに窺える点で貴重である。

ただ、これら三つの資料は、個々に利用する

だけでは必ずしも十分な効果をあげることにはできない。しかし、ほぼ同じ頃に成立したと推測される、これら三つの資料を組み合わせて分析・検討することで、17世紀末元禄年間の厳島島内の町の様子、そして人々の生活について具体化することが可能である。

したがって今後は、これら三つの資料を効果的に組み合わせ、さらに古文書・古記録を加えて総合的に分析するとともに、天明3年(1783)成立の町絵図(吉田家蔵)の記載内容と比較検討することにより、近世厳島の町の構造や住人構成の歴史的展開を明らかにしていかなければならない。その意味からも、江戸時代の厳島研究は、まさにこれからと言える。

(3) 石見銀山および温泉津をとりまく経済構造を分析し、特に戦国大名毛利氏の温泉津支配の歴史的展開について明らかにした。

すなわち、永禄5年(1562)に石見国内を平定した毛利元就は、直臣の児玉就久と武安就安を派遣し、温泉津の直轄支配を開始する。彼ら温泉津奉行は、赤間関奉行と同様、対馬の宗氏と交流するなど毛利氏の対外政策の一翼を担いつつ、当面の政治課題である出雲尼子氏攻撃のために行動する。

彼らは周辺の海辺領主や「銀山衆」と呼ばれる人々を指揮下に置いて軍事活動を展開しており、その様子が石田主税助の動向からもうかがえる。彼は、温泉津周辺の「小浦」を抱える領主であったと思われ、温泉津奉行の指揮下で船を使った軍事活動を展開したが、それは出雲国内にも及んだ。そして石田氏が数年来の「警固」活動に対する褒賞として、毛利氏から領国内諸関勘過の権利を得ていることは、彼が日常的に船舶を利用し、広域的な経済活動をおこなう領主であったことを示すものであり、それが同時に広域的な軍事活動をも可能にしたと思われる。

また、温泉津奉行の拠点として知られる鶴丸城は、毛利元就・輝元の両者によって元亀2年(1571)2月に築城が開始された。その前年5月には、出雲杵築に対する温泉津からの兵糧補給が元就によって命じられており、出雲方面への兵站基地として温泉津の町と沖泊の港が重視されるなか、温泉津奉行の増員とその拠点整備が進められたものと思われる。したがって、それまでの温泉津奉行の拠点が別の場所にあった

可能性は高く、「屯」「殿」「駒形」「殿居」といった城館関係の小字名が認められ、しかも温泉津・小浜の両地区を眼下に納めることができる丘陵がその有力候補地として挙げられる。また、温泉津・沖泊往還道の入り口に位置する西念寺の後方山腹にも「児玉」という小字名が認められ、これらの場所が鶴丸城築城前はもとより、築城後も町を直接支配する拠点として機能した可能性を指摘できる。

温泉津は、領国内の政治・経済的要所の一つとして元就の直轄地であったが、元就亡き後は輝元がその支配を継承した。出雲杵築と経済上密接な関係を持ち、兵糧補給の面でも重要拠点となった温泉津の支配を引き継ぐにあたって輝元は、それまで現地で実務に当たっていた温泉津奉行を直接つかむのではなく、元就の施政を間近で見、出雲支配にも深く関わった経験のある井上就重を、銀山奉行の林就長とともに現地支配に関わらせることで対処したが、それは元就期の支配方法を効果的に引き継ごうとする、輝元およびその周辺の政治的判断であったと思われる。

領国支配の継承を考える場合、組織や機構といった面が大切であることは言うまでもないが、過渡期においては「人」が果たす役割、その重要性も忘れてはならない。その意味で井上就重は、元就が亡くなった後の輝元にとって実に大きな存在であったと言える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3件)

① 本多博之、中近世移行期の厳島と町衆、厳島研究、査読無、第4号、2008年、1-8、

② 本多博之、厳島門前町と住人構成、中国四国歴史学地理学協会年報、査読無、第4号、2008年、22-35、

③ HONDA HIROYUKI COPPER COINAGE, RULING POWER AND LOCAL SOCIETY IN MEDIEVAL JAPAN, International Journal of Asian Studies, Cambridge University Press、査読無、4, 2 2007, 225-240

〔学会発表〕（計 1 件）

①本多博之、戦国大名毛利氏の石見銀山・温泉津支配、広島史学研究会大会日本史部会、2008年10月26日、東広島市

〔図書〕（計 2 件）

①本多博之、鈴木公雄編、岩波書店、貨幣の地域史—中世から近世へ—、2007年、209-242（第五章 統一政権の誕生と貨幣）

②本多博之、吉川弘文館、戦国織豊期の貨幣と石高制、2006年、344

6. 研究組織

(1) 研究代表者

本多 博之 (HONDA HIROYUKI)

広島大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：30268669

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者